
ネギま！ 龍騎士が行く

キング・ブラッドレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 龍騎士が行く

【Zコード】

Z0106X

【作者名】

キング・ブラッドレイ

【あらすじ】

気付いたら、俺は真っ白な空間にいた…………へ、ネギまの世界へ行け？

いや、意味わかんないんだけどーー？

よく事情がわからない内に飛ばされた世界での一人の青年（？）の奮闘録！

この小説の主人公は魔法でなく、呪文を使います

プロローグ（前書き）

勢いで書き始めた小説ですが、完結を目指して頑張ります！

ストックはある程度作っているので、ストックがある内は三日一回の投稿でやっています

また、この小説には独自設定や独自解釈がありますのでご注意ください。

プロローグ

「んあ？」

突然だが、俺は渋川一輝。
普通の高校生だ。

…………自己紹介は置いといて、気が付いたら俺は真っ白な空間
にいた。

上も下も、右も左も真っ白。

「…………」

見覚えがある。

だけど、“現実の世界”じゃない。
そう考へてみると、突然背後から声をかけられた。

『よつ。』

「……」

やつぱつやうなのが……

そこには人の形をした光が地面（？）にあぐらをかいて座っていた。

そして、人型の背後には逆さまの木 セフィロトの樹 が彫り込んである扉が浮いている。

……嫌な予感しかしねえ

「……誰だ？ あんた？」

一応聞いてみるか。

『おおー…よくぞ訊いてくれましたー！』

やつぱり予想通りといつか、人型はその質問に嬉しそうに反応する。

そして、ゆっくつと謳うように言葉を紡ぐ。

『オレはお前達が“世界”と呼ぶ存在

あるいは“宇宙”

あるいは“神”

あるいは“真理”

あるいは“全”

あることは“一”

そして

オレは“おまえ”だ』

“真理”はゆっくりと俺を指しながら言い放つた。

『 ようこそ

運命にその身を弄ばれるバカ野郎

……ん?『ライジとんでもない事言わなかつたか?

『突然だが、お前には“ネギまー”の世界へ行つて貰う。』

「はあー?」

いやいやいやいやー

それでマンガの世界だよなー??

名前は聞いたことがあるが、内容全然知らんー!

普通、真理君(?)が居るんだからハガレン!やなーのー?.

『時間が無いから、いくぞ。』

え?
。

「ねえ、持ち物はー?装備はー?けみつけめつけー?」

ギャイイイイイイ
.....

テンパってる間に扉開いてるしー!

いやあああー!

つかつかした黒い手がこぼこー!ー!

『 武運を祈るぜ。』

祈るって誰に！？

お前より上位存在はあるの！？

もうほつほつとしたところで意識が暗転した。

プロローグ（後書き）

プロローグはこんな感じです

細かい説明を受けずして理不分明な誰もが書いた一輝の運命は？

登録をしていない方でも感想を書けるようにしてあるので、感想や意見待っています

第一話（前書き）

プロローグだけだと物足りないのでもう一本

魔法のまの子も出ないです

第一話

目が覚めるとそこは、夜の森の中開けている場所だつた。側で焚き火が燃えている。

とりあえず起き上がるが、クラクラする……。なんか背が低くなってるし。

「クソ……あの真理の野郎……今度会つたらぶつ飛ばす……」

「きなり訳のわからん場所に飛ばすとか理不尽過ぎるぜ」……ちくせう。

まあとりあえず、状況確認だ。

今は夜で、周りに動物の気配は無い、側に在るのは革製の袋のみ。どつしたものか……。

「そういうば、何故に旅人の服?」

何故か服装がドラクエ装備だし。

いや、ドラクエ好きだったからいいけどさ。動きやすいし。

「それじゃあ、この袋は……?」

まさかと思つて、ぬまむろに中で手を入れて中を探つてみると、やつぱり出でたのはお馴染みの薬草だった。しかも、出るわ出るわ数えてみたら ۹۹ 『…………』。

「中の構造じつはなつてんだ？毎回思つが、絶対普通じや入りきらないよな…………。」

ぶつぶつと呟きながら、中ものを全部出してみたら、

- ・薬草 × ۹۹
- ・キメラの翼 × (恐らく)
- ・眼帯 × ۵ (?)
- ・食料 (沢山)
- ・銅の剣 × ۵
- ・鋼の剣 × ۳
- ・鋼の鎧 × ۱
- ・鋼の小手 × ۱
- ・鋼の盾 × ۱

こんな感じ。

剣が沢山あるの？とか何故に眼帯？とか、この森安全なのか？とか色々気になるがとりあえず、寝る。

「明日は水場の確保からだな…………。」 いつして、色々な不

安の中、俺の異世界（ネギまー）ライフが始まった？

朝です。

おはよひびきます、俺です。

朝起きて、昨日のつむぎにて水場を探しとおけばよかつたと後悔しました。

……顔が洗えません。

仕方無いので眠気が覚めるまで、じろじろしてから、小ぶりで取り回しのいい銅の剣を持って袋を腰に着けて探しに行きます。

んで、銅の剣で道を切り開きながら歩いて5分程の場所に水質の良さげな川を発見。

水場を確保！つてテンション上がり過ぎて、そのまま服を脱いで水浴びをする。

ここで、気付いた事が幾つかある。 水を鏡代わりにして見たんだが顔は黒髪は相変わらずで、左目は紅色になっていた。

んで、右目が……キング・ブラッドレイと一緒にウロボロスの印が出ている最強の眼です。

ああ、その為の眼帯か。

歩いて来るとき、何故か風の流れが見えている気がしたのはコイ

ツの所為つぽい。

「ん？ そしたら、身体は……」

まさかと思い、恐る恐る銅の剣で指の先をちょっと斬つてみる。鍊成反応が出て元通り。

「あちゃー。人造人間か……。」
ホムンクルス

不死じや無いだろうけど、不老なのか？

今の肉体年齢13歳程度なのだが……。このままだが、冗談じやないぞ。

水浴びを終えてとりあえず、焚き火の場所に戻り今後の方針を考える。

色々考えて、暫くはここを拠点として剣の鍛練することにした。
森の外の様子も気になるが、今ノコノコ出てつて魔物とかいたら
人造人間だからと言つてもつらいだろ。

幸いにも、元の世界ではちよいと剣術を齧つっていたので、丁度いい。てか、この身長で鋼の剣を振り回すのってシユールだな！

そういう訳で、寝る時と食事の時以外は鍛練をする生活が始まつた。

そんなこんなで、1ヶ月程経つたと思つ。カレンダーなんざ無いし、毎日やる事は一緒なので日ごろの感覚は無くなつた。最初は以前（生前？）使つていた木刀の片刃と鋼の剣の両刃の勝手の違いに悩まされたが、使いこなせる様になつた。

しかもこの肉体のスペックが素晴らしい、重い筈の鋼の剣が片手で軽々と取り回せる。

ウロボロスの田は風の向きや動きなどが見えるが、脳への負担が多少あるらしく、最初は数分間意識して使うだけでも頭痛がしたがもつ慣れた。

まあ、不気味過ぎるから人前では眼帯をするけどね。

それと、薬草を増やすために薬草にこびり付いてる種で栽培（？）なんかも試してみた。

こつちもこつちで凄まじく。適当に耕して、埋めると一週間程で1メートル程の薬草の葉がなる木になつた。雑草より強靭だぞ、これ。薬草の葉を採つていくと偶に上薬草も見つかった。恐らく、上薬草は薬草より充分な養分を吸収したら出来るのだろ？と思つ。

そして、気になる点が一つ。行動範囲を広げようと川へ向かうの
とは逆方向を散策していたら、何かが通ったかのようにならしき木々が倒され
ていて、地面には大きな人間らしきモノの足跡が付いている
所が幾つかあった。

足跡は全て一方向へ向いていて、辿つていいくと終着点には巨大な
洞窟があつた。…………嫌な予感しかしねえ。

とりあえず、洞窟の怪物は無視して鍛練を続ける事にした。

そして、ある日恐れていた事が現実になった。

「おいおい…………マジか。」

「…………」

水浴びの帰り、遂に怪物と鉢合わせしてしまった。
怪物は一角に大きな一つの眼に青い肌の巨人…………。

「ギガントスじゅん。」

棍棒は持つてなかつたりと、所々違つがな。だが、筋肉ムキムキのマツチョな点は一緒。

とりあえず、

「三十六計逃げるに如かず！..！」

「！..！」

一田戦術的撤退をする。

ここで戦うのはベースキャンプ（仮）が近くにあるので、不味い。何より、防具も剣も何も装備していない。

キャンプと逆方向に全力で逃げつつ、籠手を着けて鋼の剣と鋼の盾を持つ。鎧は悲しい事に、身体にまだ大き過ぎて合わない。ギガントスマドキの歩く速さはは遅い様なので、助かった。

「さあて……行きますか！..！」

俺は頬を叩き氣合いを入れて、ギガントスマドキに向かって疾走した。

第一話（前書き）

一話です

いきなりの戦闘回

第一話

side ロト

「クソツ！」「イツ強え！…！」

「…！」

ギガントスマードキに挑んだがいいが、如何せん手強い。

素早さはそこまで早く無いが、力が恐ろしく強い。しかも、タフで斬つても怯みもしないで腕を振り回すから質が悪い。

まだ一度も攻撃を食らつてないが、当たつたら只では済まないだろつ。最悪ミンチだ。

“死に難い”身体だが構造は一緒の為、痛いものは痛い。

「ちいっ！…！効いてない様だな…！」

「…ツ…！」

足を斬り続けてみるが、効果があるようには見えない。

ギカンテスモドキが両手を命ぜてオルテガハンマーの様に振り下ろす。俺はギリギリのラインを見切つて躱し、そのまま腕を駆け上がる。

「オーラア！！！」

ザシユ！！

「ツ！…！」

そのまま剣を振り回しながらギガンテスモードキの身体を一気に駆け上がる。

肩に到達した所で目に剣を突き刺そうと跳躍したが

「なつ！？」

一
二
三

ドンシ――――

「ぐつ……」

顔を逸らして避けられ、そのままヘッドバッジを食らった。
咄嗟に盾で防いだつてのになんつう威力だ？腕が逝きかけてら…
…。

「これじゃあ、盾の意味がねえなつとーー！」

「 ッ ー？」

盾は放棄して、ブーメランの要領で田を狙つて投げると見事命中
したが、田を庇いながら暴れ始めた。

「ああクソッ！ーー大人くしてろーー！」

動きが大振りになつたが、完全に適当に手足を振り回しているだ
けだから動きが読み切れない。

一旦背後に回つて ！？

「ガーンーー！」

「がふつーー！」

クソツ……振り回しているだけの腕にクリーンヒットは笑えない
せ……

頭から地面に叩きつけられた。これで一回死亡。肉体がボロボロだ。直ぐに再構築されるから問題ないが

「あーあマズい、脳震盪だ。」

脳が揺らされて、周りの景色がぐこやぐこになつてゐる……こりや、ヤバイ。

「…………」

ギガントスマドキが田潰しから復活したようだ。

こつちもある程度治つたが踏み潰されたら再生に時間が掛かるし、その間にメッタメタでENDだな

なら選択肢は一つ。

「躲す。」

感覚を研ぎ澄ます

突破口を抉じ開ける

駆ける

「先手必勝！！」

疾風の如く

「疾風突き！！！」

ズブシュ！！！

「ツツ！？」

「「つおつーー？」

ギガンテスマドキの攻撃を躱して突きさした鋼の剣は深々と腹に刺さったが、ギガンテスマドキは大きく暴れ始めて振り落とされた。

これでも効かないのか！？

とりあえず、今のうちにもう一本鋼の剣を袋から取り出して様子を伺う。

もうカウンターはゴメンだ。

「…………」

落ち着いた（？）ギガンテスマドキは腹から剣を抜いて握り潰した。絶対掘まりたくないな……。

そして、くるりと振り返つてどこかへ歩いていく。俺を放つて巣に帰るみたいだ。

俺もこれ以上戦いたくないから追わないがな。とりあえず、

「疲れた…………。」

粗方治つた肉体の再構築を中断してその場に寝転がる。傷が残っているところは薬草を貼ろう。

今日はギリギリ引き分けだったが、余裕で勝てるぐらいたしなき

やな。明日から、また鍛練だ。

「収穫もあつたしな。」

きつかけは偶然だけど、疾風突きが使えるようになつた。疾風突きが存在するなら、他の剣技も有るだろ？

これで技を覚える楽しみも出来るし、一石二鳥だ！

ギガンテス（モドキと付けるのが面倒になつた。）との初戦から約半年経つ。鍛練とギガンテスとの実戦の繰り返しで遂に……

「完全勝利！！」

一撃も食らわずに倒せた！！

あれから使える様になつた剣技は隼斬りだけだが。王者の眼にも完全に慣れた

てか、この眼は魔力とかも見えるんだな。

とりあえず、ギガンテスは倒した（氣絶してるだけで死んでない。恐ろしい程頑丈だよコイツ…………。）ので氣絶している間に、ギガントスの住みかの洞窟の中に入つてみる。

中には大きな骨があちこちに転がつていて、獣の匂いがする。焚き火の跡とかもあった。正直、あの脳筋に火を燃やす技術がある事にびっくりだな。更に奥に進むと一番奥に台座が在つて其処には一振りの剣が刺さつていた。

「これは……隼の剣！」

隼の剣は簡単に台座から引き抜けて、柄の部分が吸い付くようにフィットして、本当に羽の様に軽かった。

ギガンテスからはいい剣を（勝手に）譲り受けれたな。

それで、俺はこの森を出て外へ行つてみようと思つ。

自分で言つのもどうかと思うが、ギガンテスと鍛えて実力も着いたし賞金稼ぎ《バウンティハンター》でも、始めてみる。

その為に必要なのは……

「名前、だな。」

多分、和名じや訝しがられるだるしき生まれ変わったみたいなもんだしな。

名前はキング・布拉ックレイでもいいけど、は德拉クエから取つて、

「　　ロトにじょう。
ロト・ド・ゴニクスだ。」

ロトは言わずもがな。ド・ゴニクスはド・ゴンクエストをちょっと文字つてみた。

「…………もつらいやる事はないな。」

ギガンテスも倒したし、薬草の木からは、また生えるだけの量を残して、葉を取れるだけ取つた。

「いくか……。」

俺はそう呟くと、ギガンテスの森を跡にした。
もしかしたら、俺
ロト・ドラゴニクスの人生はここから始
まつたのかもしない。

第二話（前書き）

二話です

賞金稼ぎとしての話

side 口ト

ギガンテスの森を出た俺はヘルス帝国なる場所に着いた。ここを賞金稼ぎの拠点にしようと思つ。

賞金稼ぎにはギルドが有るようだが、とりあえずフリーランスでやつて行くことにする。

どこのギルドに入つてもいいが、賞金稼ぎを専門職にして食つて行つとは思つてないので、止めておく。

「おこ坊主！こまガキの来るとこがいやねえぞ！」

近くにあつたギルドに入り、フリーランス向けの提示板を眺めてみると何処かの「ロッキ」にしか見えないオッサンが絡んで来た。まだ昼間だったのに酒飲んでるし。

まあ、賞金稼ぎのギルドに子供が入つてきたら疑問に思つた。

「何か問題が？」

「つーーー、いや……何でもねえ。」

少し殺氣を込めて威圧したら、大人しく引き下がった。何か周りの大人も感心した様にこっちを見ている。

「とりあえず、手堅いとこ」「……。」

30万ドラクマの賞金首の依頼の紙を取ろうとした際に物凄く気になる依頼があつて、固まってしまった。

・キュクロープスの討伐

場所：タルタロスの森

報酬：200万ドラクマ

「……。」

キュクロープスって絶対あのギガンテスの事だよな……。あれってかなりランク上だつたんだ。

「 これで頼む。」

「はい。30万ドラクマのアブドミナル・ゼーレーヴェね。頑張つてね、坊や。」

「 ああ。」

まあ、依頼を変える積もりは無いがな。

巨人と普通の人間サイズじゃ勝手が違うし。同じ200万ドラクマの人間を相手にして絶対に勝てる自信は無い。

何はともあれ、

「 いくか……。」

「アブドミナルと後は、判るな？」

「はつ！…ガキにやられる程落ちぶれちゃいねえぜつ！…」

ゼーレーヴはさう言ひ放つと懐から杖を取り出した。

「魔法という奴か……。」

「後は、判るな？」

「はつ！…ガキにやられる程落ちぶれちゃいねえぜつ！…」

ゼーレーヴはさう言ひ放つと懐から杖を取り出した。

「魔法という奴か……。」

俺は、背中に刺してある隼の剣を鞘から抜いて疾走する。距離は15メートルぐらいか。

「 集い来たりて敵を撃て！連弾・炎の26矢！」

ゼーレーヴェは炎の矢を放つて来るが、

「……………遅い。」

「 んなあ！？」

俺は持ち前の動体視力で全ての矢を見切り、光弾の間をすり抜け
るようにして躲す。

身体が小柄な事もあり、躲すことは容易だ。

「 クソツッ！

集い来たり「 疾風突き！」 ぐえ！

「 安心しろ。峰打ちだ。」

「フリーランスは辛いよってか……。」

ゼーレーヴンをしょっぴいてギルドに戻ったが、貰えた報酬は18万ドラクマだった。

仲介手数料やら何やらでフリーランスの賞金稼ぎはギルドに4割渡すんだと。

「やっぱりどつかのギルド入るっかな……。」

正式にギルドに入れば、報酬丸々貰える様になるらしい。子供のを雇うギルドが有るかどうか疑問だが。

それはさておき、

「魔法を使ってみよう!」

なげなしの金で初心者向けの魔法の本と練習用の杖を買つて、タルタロスの森に来ています。王者の眼で確認したところ、俺は魔力はかなりの量を保有しているみたいなので魔法が使える筈!

「えっと、一番簡単な魔法は……プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

……火は出ません。

「プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

……。

「プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

「プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

（2時間後）

「ふ、プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

（四時間後）

「グスツ……プラクテ・ビギナル 火よ灯れえ！！！」

灯れと言つか、灯つてください！

結局、この日一回も灯りませんでした。orz

一週間経つたけど、根気良くなつてます。未だに火は灯つてないです。んで、少しやり方を変えてみる。

今までは詠唱中に魔力を込める感じでやつていたけど、詠唱の前に魔力を込めてみる。

「（田をつぶつて、魔力を引き出す……。）」

充分だと感じたところで、田を開けてみると。

「…………何コレ。」

魔法は発動した様子。だけど、金色に輝く古代文字のようなのが俺の周りを漂っている。んで、唐突に出てきた呪文の発動キー。

「 『メラフ』 」

『ゴンジ……！

「 つおつーー？」

唱えた瞬間、火の玉が飛び出て地面に着弾すると人の大きさ程の火柱になった。

「 ドラクHの呪文は使って、この世界の魔法が使えないってトコか
? これは? 」

その後も色々調べてみたが、やっぱり魔法は使えなかつた。

呪文は全属性の呪文が使えるには使えたが、色々と差異があつた。とりあえず、収穫があつたので意氣揚々と一週間振りに街に戻ろうとキメラの翼を使おうとした所に。

ガサツ

ん？

」ナニハ一〇。

バタツ

「お、おー！」

物音がして音の方向を見てみると、そこに居たのはケガをしてキズだらけの竜の雛だつた。

「えりと、とりあえず……《ホイリ》」

ホイミで傷を癒すが、まだ未熟で適正も無い為、余り回復しない。 しょうがないので、薬草を傷の部分に貼りつけて袋から食料の干し肉を取り出し、口先に近付ける。

『中華書局影印本』

「いいから食え。」

威嚇するような仕草をしたが、それに構わず干し肉を押しつけると、観念したのか食べはじめた。 それと、川から水を汲んできて飲ませる。これで大丈夫だろ。

「あとは、自分で生きろ。」

ギガンテスもここには近寄らないだろうしな。

俺は竜の雛が眠っているのを確認したキメラの翼を放り投げて街に戻った。

今、俺は賞金首を追つて街の外を外を歩いている。

竜の雛を助けてから2日経つた。調べてみたら、あの竜は黒龍という龍の雛らしい。

黒龍は龍種の中でも上位に位置する存在だと叫ぶ。親に見つかったらどうなった事やら……。

「キューハーーー！」

そんな事を考えていたら、空から何か降りてきた。
と、いつか……

「お前……の前の雛か！？」

「キュイイー！」

一昨日助けた竜だった。礼でもいいに来たのか？

「あー礼はいいから。頑張って生きろよ。」

俺はそれだけ、言つてさつと歩き出すがクロスケ（仮）は後ろ
を着いてくる。

「なんだ？まだ何か有るのか？」

「キューハーーー！」

クロスケ（仮）はまた一鳴きするだけ。ん？もしかして、

「お前、一緒に着いてきたいのか？」

「キュイイ・キュイ！」

クロスケ（仮）は首を振つて反応する。お前言葉解つてんのか？

「はあ…………じゃあ行くぞ。」

「ギュヒー！」

このまま押し問答しても無駄だらうし、黒龍なら戦力になるだらう。

クロスケ（仮）は嬉しそうに鳴いて後ろを着いてくる。

奇妙な道連れが出来たもんだな…………。

余談だが、賞金首をしょっぴいてギルドに戻つたら後ろを着いてくる黒龍の雛を見て物凄くびっくりされた。

第三話（後書き）

こんな感じでした

次回は設定を載ります

第四話（前書き）

賞金稼ぎと書つなのであるひとは戦う事になる訳で……

誤字修正しました

いつの世界に来てから、何十年か経つた。

結局、賞金稼ぎとしてひたすら賞金首を捕まえてきた俺には、いつの間にか、一つ名が付けられていてかなり有名になっていた。その名も“隻眼の竜騎士”

他にも“呪文使い”『スペルマスター』や“ドラゴンライダー”なんてのもある。厨臭え……。

竜騎士ってのは、黒龍のドラゴンを連れているからだろうな。それと、あの黒龍は名前はドラゴンにした。ドラゴンも立派に成長して、まだ成体では無いだろうが、かなり大きくなつた。

俺を乗せるには充分な大きさなので田舎地に行くときは重宝している。

それで、今俺はアフリカに居る。ドラゴンは流石に連れてこれなかつた。

対峙するのは妙齢の女性と人形。女に手を上げるのは趣味じゃないんだが……この依頼、受けなきやよかつた。

“闇の福音”エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルだな？

「そつだが、貴様は何者だ？」

「賞金稼ぎ《バウンティハンター》ロト・ドラゴンクス。」

「！！ ほうー！“隻眼の竜騎士”がこんなガキとは思つてなかつたぞ！」

「ほつとけ。実力と年齢は関係無いだろ？」

実際は50年以上生きてるしな。

因みに、外見年齢は16歳ぐらいだ。

「フツ、違ひない。では、行くぞチャチャゼロー！」

「アイサー、御主人。」

その一声で戦いの火蓋が切られ、人形が武器を持って斬り掛かつてくる。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァンジエリンは前衛を人形に任せて魔法の詠唱を始める。俺も人形を相手にしながら、マルチタスクで魔力を貯めて呪文の発動準備に入る。

「魔法の射手・闇の34矢！！」

「《ドルクマ》！」

人形の相手をしながら、魔法の矢を闇の呪文で相殺。

「魔法の射手・連弾・闇の299矢！！」

人形が離脱し、間髪入れずに生じた魔法の矢が殺到する。

俺は避ける事はせず、前傾姿勢を取りながらエヴァンジエリンに向け疾走し、魔法の矢は確実に当たるのだけを王者の眼で見切つて隼の剣で落として行く。

「なにつ！？」「惚けていいのか？」クツ！…」

俺の行動にエヴァンジエリンは驚いた表情をする。俺が接近し斬り掛かろうとしているのを見て、慌てて空へ飛んで回避しようとするが、甘い。

「飛べやしないが、跳べるんだぜ？」

「！？」

純粹な身体能力だけで飛び上がり、メラ系統の力を載せた隼の剣で斬り掛かる。

「　　火炎斬り！！」

「氷盾！！」

不意を突いた積もりだったが、相手は何百年も生きた吸血鬼。障壁を出して防ぐ。

「相殺されたか！」「オレヲ忘レテンジャネエゾ！」チイツ！！

地面に着地した隙を狙つて人形が斬り掛かつてくる。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァンジエリンが詠唱を始めとそれに伴い、掌には高密度の魔力が収束していく。上位魔法か！

「 契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえのやみえいえんのひょうが 」

俺もそれに対応するために魔力を掻き集める。
そして

「 おわるせかい！！」

「燃やし尽くせ！！『メラゾーマ』」

ぶつかり合つた氷の魔法と炎の呪文が大量の水蒸気を生み出し、
お互いの姿を隠す。

だが、俺には右目の王者の眼がある。空気の流れを読み、エヴァンジエリンと人形の居る方向に爆発呪文をたたき込む。

「はぜる。『イオナズン』」

ドゴオオオン！！！

魔力による大爆発が起こり、大音量が鼓膜を襲う。しかし、間髪置かずナイフが俺の顔面目がけて飛んできてきた。

ザシユ

「グッ……。」

咄嗟に左腕をかざして防ぐ。煙が晴れると無傷では無いが、重傷があるわけでもないエヴァンジェリンと人形が見えてきた。

side out

side ハヴァンジェリン

クッ！油断をした訳では無いが、相手の行動が普通の相手とは違うからに遣りにいく。それに……

「…………その眼はなんだ？魔眼の一種か？」

右目の眼帯の下にあつた眼には黒田の替わりにウロボロスの印が刻まれていた。

「ん？ これは言つなら…………“最強の眼”だ。」

そう言つて、“隻眼”的龍騎士は不敵に笑つ。

「謎かけか？ つまらんぞ。」

「相手に自分の手札を晒すわけないだろ？」

違ひないな。

ロト・ドーラゴニクスは会話をしながら此方を警戒しつつ、左腕のナイフを抜く。
そして、

「なー？」

馬鹿な！傷口が再生していく！？

「貴様！！吸血鬼だつたのか！？」

「いや。俺は人造人間の一種でな。ホムンクルス」

はあ！？人造人間だと！？」

「ありえん！？！」

それを聞いて、ロト・ドラゴニクスは今度はニヤリと笑つた。

side out

side out

「ありえん！？！」

ほお、そう言つちやうか。

「あるいは、なんて事は“ありえない”ぜ」

「…………。」

いやー、またやったよなヤツ。

「吸血鬼のお前も、魔法使いも実際はお伽噺の様な存在だろ?」

ぬらりひょんとか狼男とか居そうだし。

「さて、お話は終わりだ。続きを…………ん?」

「イツ右田で見ると、ぼやけて見える。

まさか幻術か? いっちょ試して見るか…………。 右手をエヴァン
ジエリンに向けてかざす。その行動を見て身構えるがもう遅い。

「《凍てつく波動》」

「「なー?」」

波動によつて全ての付加効果が解除されて、エヴァンジエリンと俺、双方から驚きの声が漏れる。

「き、貴様！－なんの魔法だ！？何をした！？」

エヴァンジエリンは波動によつて幻術が解除された事に驚いている。

おーおーずいぶんテンパつてやがる。

俺は、幻術が解除された本来の姿に驚いた。

「外見ガキかよ…………。」

ますます、やる気でねえ。

「なつ……」れでも貴様より400年は生きてるわー！」

「遠マワシー、外見ハガキダツテコト認メテルナ御主人」

「チャチャゼロは黙つてろ！－！」

ルだ。
ケケケケケと人形が笑ってそれを幼女が怒鳴ってる。シコー

「あー俺、帰つていいか?」

「なつー！貴様ー！私を狙つて来たのじやなかつたのかー！」

「ナンダヨ。モット斬リアオウゼ。」

「いや。俺子供に手を出したくないし。」

「私は大人だ！！！！！」

そう言つてる奴に限つて子供なんだよ。あーシリアスがぶち壊しだ。壊したの俺だけど。

「興醒めだ。帰る。」

「貴様……そつ馬々と歸すと思つてゐるのか……」

「ケケケケケ」

エヴァンジェリンが魔法の詠唱に入り、人形が斬りかかるう
とするが遅い。

「じゃあな。《レムオル》」

「「...?」」

レムオルは光の当たり具合を調節して自分を透明にする。気配や魔力さえ遮断するからある意味最強の呪文だ。まあ、物音は普通に立つし、透明化したら攻撃は出来ないっていう欠点はあるけどな。 とりあえず、魔法世界に帰るか。ドランを迎えに行かなくちや。

side out

side エヴァンジェリン

「クソッ！ なんだつたんだアイツはー！」

捕まえるって言って現れて、自分が人造人間ホムンクルスだとか言つたり、
幻術解いたり引っ搔き回すだけ引っ搔き回して帰つて……！！！

「今度会つたら許さん！――」

「ケケケケケ　ズイブン樂シソウダナ、御主人。」

全然楽しくない！

side out

第四話（後書き）

とこの事で、エヴァとの戦いでした

感想や意見、アドバイス等頂けたら嬉しいです

第五話（前書き）

大戦期前最後の話になります

では、どうぞ

side 口ト

今、ドランを迎えて行って、エヴァンジエリンを捕まえる依頼を受けた、ギルドに失敗を告げてから今夜泊まる宿を探しているんだが、

「何だかなあ……。」

簡単に言つと、賞金稼ぎが遣りにくくなつた。

現在もフリーランスの賞金稼ぎとしてやつてているが、“隻眼の龍騎士”など割と有名になつたので、あちこちのギルドから勧誘が来ている。別に何処かのギルドに入つて問題は無いが、自由に動いたい時に動けなくなるなど俺からするとデメリットも多い。

賞金稼ぎを辞めても数年は生きていける貯蓄はあるが、この年で隠居生活は「ermenだし何よりもせつかく貰つた力だから、何かに活かして行きたい。

「うーむ……。

ここまで考えてふと、妙案が浮かんだ。

「自分でギルドを作ればいいじゃないか。」

なんで気付かなかつた……。

で、

思い立つたが吉田と、その田のうちにギルドの創設をヘラス帝国に申請して数日後、回答が有り創設の許可が出た。しかも、ギルドの本拠地建設場所もヘラス帝国首都に作りドランの為のスペースも設けてくれるだと。

ギルドの名前は《アレフガルド》にした。自分の名前も“ロード”にしたので、ね。

あと、ギルドマークはウロボロスと一緒に形だ。

余談だが、“龍の騎士団”とかどうかと、申請しに行った時に申

請書を受け取った人に言われた。

まあ、“賞金稼ぎ”であつて“騎士”じゃ無いので却下したがな。俺のファイトスタイル殆ど騎士や剣士と似たようなモンなんだけどね。隼の剣の見た目がそんな感じだし。

閑話休題

それで、申請自体は許可されたんだが何故か皇帝陛下に召集されて謁見する事になった。
なんかしたつけ……

コンコン

「準備が出来ました。陛下がお待ちです。」

城へ行くと、待ち合ひ室の様な場所に通された。暫く待つていて準備が出来た様で、ノックをして衛兵が声を掛けてくれた。
恐らく皇帝直属だらう。立ち振る舞いに気品が感じられ、実力も確かなようだ。

「此方に。」

「失礼します。」

衛兵に扉を開けてもらいて中に入る。

そして、扉の向こうに居たのは、式典等で何度か見たことのある「ラス帝国皇帝」の本人だった。

「お初にお目にかかります。私が、今回ギャルグの設立を申請せしめ貰つたロード・ドーラゴニクスです。」

礼儀作法はいまいちわからないが、跪いて口上を述べる。

「つむ。楽にして良い。顔を上げよ。」

「はい。」

「お……………言葉一つ一つに威厳を感じるな。」

「尊は聞いておる、ロード・ドーラゴニクス。賞金稼ぎとして黒龍を従えておるわけじゃないか。あつぱれじゃな。」

「勿体なき御言葉です。」

そう言つてホツホツホツと朗らかに笑うが、次の瞬間には顔を引き締めた。どうやら本題のようだな。

「それで、本題なんじゃが、ちょいと帝国の為に動いてくれんかの？」

「は？」

思わずそんな声が出てしまった。

「いやいや。今すぐことは言わんよ。ここ最近連合との関係が悪くなってきての……。」

と、最後まで言わず言葉を濁す。成る程。この人意外とタヌキだ。だからあんな好条件でギルドが創設させてくれるのか。貸しが一つひとつコトだな。

「私で良ければ、何時になるか分かりませんがお受けいたしましょ

う。」

「構わん。助かる。」

話はこれで終わりだった。

さて、次はギルドの人員募集だ。これから忙しくなるぞ……！

side out

side ヘラス帝国皇帝

「ふう……。」

今さつき面会した相手、“隻眼の龍騎士”ロト・ドラゴニクス。依頼の成功率は八割強を誇りる賞金稼ぎで、失敗したケースの賞金首は大抵、理不尽な理由や、濡れ衣の疑いがある者ばかり。恐らく見逃したのであろう。

実際に会つてみて顔を見たが誠実そうな顔立ちの青年だった。人間的にも信頼出来そうなので、帝国の為にと頼んでみたが快く承諾してくれた。

「テオドラの護衛でも頼むかの。」

あれはじやじや馬だ。少しでも年齢が近い人を据えたら幾らか大人しくなるだろ？

最近、身の回りの近衛の兵士の入れ替えが度々ある。何か大きな事が近く、起きそうじやな……。

side out

side out

“隻眼の龍騎士”がギルドを立ち上げると聞いてか、随分多くの人員が集まつたみたいだ。

ギルドメンバーの選抜は俺が直々にやつてている。他の人に頼んでもいいが、将来仲間になる面子だ。自分でやりたい。

ギルドへの入団試験は皇帝陛下にコロシアムを使って良いと言われたので、そこを借りて何日かに分けて、やつてている。

入団試験は費用は無料、試験の内容は俺と戦つて“納得させろ”だ。中にはミーハーな連中や冷やかしで来たようなも居たが、いい腕の奴も集まっている。

「ま、参りました。」

「うん、いい戦いだつた。次！」

「次は僕だよ。」

相手の首に隼の剣を当て、降参をしたのを聞いて次を呼ぶと、出てきたのは、赤と白で纏められた様な貴族の様な服を着て羽の刺さったハットを被った金髪の優男。

「コイツは……確かに“赤き貴公子”って2つ名が付いている奴だ。どつかのギルドに入つてた筈だが……わざわざ抜けたのか？」

「コイツの登場で周りで見ていた人々もびよめく。」

「隻眼の龍騎士を相手に試合が出来て、僕は光栄だよ。」

「御託はいい。さつさと始めるぞ。」

お世辞を聞き流して、隼の剣を構えて促すと、相手も黙つて杖を構えた。それでいい。

「初手は譲ろう。掛かつてこい。」

「お言葉に甘えさせてもらうよ ルック・ルックス・ルッキン
グ ものみな 焼き尽くす 净北の炎 破壊の王にして 再
生の徵よ 我が手に宿りて 敵を喰らえ 紅き焰!!」

「《バギマ》」

“赤き”と言つだけあつて炎の魔法で攻めてくる。てか、始動キーにセンスが感じられねえ……。バギマで相殺して、体勢をなるべく低くして肉薄すべく疾走する。

「炎の射手 連弾 69の矢!!!!」

牽制に矢で段幕。悪くは無いが……。

「甘い。《爆裂斬》」

「なつ……」

隼の剣にイオ系の魔力を込めて振るうと、爆発を起こして炎の矢

を難はらつ。

慌てて次の魔法を詠唱しようとしているが、もう遅い。純粋な脚力だけで接近して首に剣を当たし、終了。

「参ったよ、流石だね君は。

じゃあ、試験の結果を楽しみにしてるよ。」

そう言い残してさつさと、去つていった。

まあ、強いっちゃそこそこ強いが、アイツは不合格だな。

「次！」

氣を取り直して、次を呼ぶ。

「はつー・アラン・サントハイムですーーー！」

「ーーー……ようじくーーー」

出てきたのは質素な身なりだが、それなりに体格のいい男。魔法剣士タイプか？

まあ合格、だな。

「ソレで正直に言つてしまつと、合否の判定は殆ど最初に付けてい
る。

見るのは“田”だ。

じつは長年、賞金稼ぎをやつしていると、田を見ると本質的な部分が
わかつてくる。

それで、まだ実力が無くても誠実な奴とかを選抜している。

因みに、さつきの奴は軽薄で自分の身が危うくなると保身に走
る様なタイプだな。

「それでは、行くぞ！」

「まつー。」

ひとまず、考えるのを止めてアランと向き合つ。

「行きます！」

アランが一声上げて魔法の詠唱に入る

こうして、“隻眼の龍騎士”ロト・ドラゴニクスを初代マスターとする賞金稼ぎギルド『アレフガルド』が設立。魔法世界大分裂戦争15年前の出来事だった。

次回は設定を載ります。

感想や指摘、要望等気軽にどうぞお願いします (—) m

設定（前書き）

設定です

筆者としてはかなり練りこんだつもりです

設定

名前：ロト・ドラゴニクス

性別：男

種族：ホムンクルス人造人間

容姿：黒い短髪に、切れ長の紅い目。右目は眼帯をしてる。イメージとしてはBLEACHの黒崎一護。

性格：比較的思慮深いが、偶に思い付いた事を直ぐ口に出したり、行動したりする。

賞金稼ぎという職業に誇りを持ち、義理がたい。また、少し口が悪い。面倒見がよかつたりする。

Fate風ステータス

- ・筋力：B -
- ・耐久：D
- ・敏捷：A +
- ・魔力：A
- ・幸運：C +

固有スキル：

王者の眼

ウロボロスの印がある右目で、気や魔力、風の流れ等が見える。魔力が見える為、幻術や認識阻害の魔法も見破れる。飛んでくるの銃弾の回転してる様子がはつきり判るレベルで、モノを“見る”という点では最強。

左目は動体視力がいい只の目

呪文

魔法が使えない代わりに使える。

呪文適正は

メラ デイン>ヒヤド=イオ ギラ>バギ>ドルマ となつている。

回復呪文は不得手で、蘇生呪文は使えない。補助呪文は効果は自分自身にしか反映されないものが多い。

フィールド呪文も使える。

備考：

ホムンクルス

人間をベースにした人造人間で身体能力は非常に高い。

身体には賢者の石が埋め込まれていて、これにより肉体の再構築が可能。再構築の速度や優勢部位、有無は本人がある程度制御可能。しかし、再構築の最大速度は本来の人造人間より遅い。

また、賢者の石によって加齢も抑えられており、内包する賢者の石を消費し続けると加齢速度が上がりつていき、賢者の石を使いきると加齢速度は、極一般的な人間と一緒にになる。また、気は使えない。

魔力量はドラクエ風に表記すると、500前後。因みに、ナギは400程度、木乃香は600強。

名前：ドラン

種族：黒龍

ロトに雛の頃に助けられ、以来行動を共にしている龍。

基本的におとなしい性格で、人を背中に乗せる事を嫌悪しないく、専らロトの移動手段になっている。

戦力としても申し分なく、火球を放つて攻撃や、翼で大風を巻き起こしての牽制や体当たりなどする。

呪文について

ロトが使う呪文は、魔法とは異なる。メリット、デメリットとしては、

- ・詠唱が極端に短い。
- ・発動まで呪文の種類がわからない。
- ・魔力消費量が多い。
- ・魔法障壁が存在しない
- ・発動媒体（杖）が必要無い

など。

呪文適正と呪文の関係は適切が低ければ低い程、使用するときに効果が弱かつたり消費魔力が多くなる。

呪文自体の強さは、勇者特有の呪文であるライティン・ギガティンが最強で次点でイオ系その後はドルマ・ギラ・メラ=ヒヤドバギとなる。

攻撃呪文は

メラ メラミ メラゾーマ

ヒヤド ヒヤダルコ マヒヤヒバ

ギラ ベギラマ ベギラ"ロン

ライティン ギガティン

ドルマ ドルクマ ドルマ"ロン

と変化する。

設定（後書き）

仮契約カードは本編で載せます

感想や意見、要望等あつたらい気軽に寄せください m(—) m

第六話（前書き）

むつ一話投稿

あとがきにアンケートあります

side 口ト

『アレフガルド』を作つて、14年。俺はアラン（アラン・サントハイム）にギルドを一時的に預けて、魔法世界をドランと一緒に回つた。

ギルドを抜けると表明した時はメンバーからなぜ抜けるのかと、口々に引き留められたが旅をしたいと言つたら“まだ若いんだから世界を見て、色々な人と関わって来い”と暖かく送り出してくれた。嬉しくて涙が出た。

アランはギルドに入つてからメキメキと頭角を表してギルドのメンバーからも慕われていたので、ギルドを渡して安心して旅に出れた。

旅に出た理由としては、皇帝陛下があつしゃつていた様に最近、帝国と連合との関係が益々悪化してきて、戦争になる前にゆっくりと旅行したかったからだ。

それに、アランには二代目ギルドマスターに成つてもひつもりなので研修みたいな感じでちょうど良い。

そして、ギルドを抜けて1年程経つた頃、帝国は連合と戦争になつた。

俺は、皇帝陛下から“借り”の内容が戦力として戦地に行つてくれ、といつ内容だとずっとと思っていた。

だけど、陛下からの頼みは「第三皇女の護衛をしてくれ」というものだった。なんで俺に?とも思つが戦争の手助けをしてくれと言われるよりずっと楽なので快よく受諾した。

そういうえば第三皇女って式典とかで見たことないな、とか考えながら、謁見の間に通されて暫く待つていて勢いよく扉を開けて遣つてきたのが

「お主が“隻眼の龍騎士”のロト・ド・ゴークスか! サインが欲しいのじゃ!」

このチャンククリンだった。

「んー……あー……。えつと、お嬢ちゃん? 俺は訳あつて第三皇女のテオドラ様を待つてるんだ。サインならやるから、後にしてくれないか?」

とりあえず、頭を撫でながらやんわりと注意してみるが……なんかムツとしている。

「私が第二皇女のテオドーラじゃー。」

「おいおい、俺にそんな冗談は通じねえよ。本物の皇女様に失礼だろ?」

「妾が！本物のーテオドリゴーじゃーーー。」

「そうか。それは凄いな！」

卷之二

何やら涙目になつて來たので、扉のところで佇んでゐる衛兵に田中で確認すると、苦笑しながら首肯された。

まさか
…
!

「本物？」

「やつあかのめいじゆうじやうじい」

マジか。

「あー……申し訳ありませんでした。」

とりあえず、跪いて非礼を詫びる。自分よりつまらない奴に敬語つて物凄くむず痒くなるな。

「はあ……もうよこ。話し方も普通にしてよこ。」

ほつ、助かつた。

「まあ、改めて紹介させて貰つたが、お前の護衛を頼まれたロト・ド・ラゴニクスだ。ロトでいい。よろしくなテオドラ皇女様。」

「よろしくなのじや。妾はテオでよいぞー。」

そう言つて、テオは嬉しそうに笑つた。

side out

side other

「んじゃ、非礼の詫びに向か一つ願いを聞こいやれ。」

無理な願いは勘弁など、付け加えてロトがテオドリック。テオドリックは少し思案したあと、ニヤリと笑った。

「ひとつと城の外をひとつと回つたにのじやー。」

「おし、わかつた。」

「…………へ？」

テオドリックとしては冗談半分で言つた事だったが、すんなりとOKを貰えるとは思つていなかつたなので呆然となつた。

皇女の身であるテオドラは稀に城から出られる時は何人もの護衛が付いていて、窮屈で仕方なく店の人々も畏まつてしまつてつるぎりしていた。

「それだったら、どうするのじや？」

「いじめるんだよ。」

やつ言つ放つと、ロトはさくから一本の杖を取り出すとテオド

ラに向かって振るつた。

「《モシャス》」

「おおー？おおおおー？」

ロトが杖をテオドラに向かって振ると、テオドラの姿は扉の所にいる衛兵と声も顔かたちも瓜二つになつていた。

「このロトが振つた杖は、“モシャスの杖”と言つて通常の場合、唱えた術者にしか効果の無いモシャスを杖に術式を組み込んだ特別な杖だつた。しかも、変化する対象を選べて、アーティファクト以外の変化した人物の能力を継承出来るという、なかなかえげつない代物である。因みに効果がある時間は3時間だ。

「これは凄いのじやーーーロトーー凄いのじやーーー」

「おー、テオ。落ち着けよ。」

何やら興奮しているテオドラにモシャスの杖の効果を説明する。時間に限りがあると聞いてテオドラは焦り始める。

「時間に制限があるなら急ぐのじやーーー」

ロトの手を引き、テオドラは急いで城を出る。今更ながら、テオ
ドラの口調で男が喋ると凄まじく奇妙である。

「ロト……」これは何なのじやー?」
「だから大声だすな。
あーっとこれはな……つていねえしー!」

「ロト……早く来るのじやー!」

色々な物に目移りするようだが、テオドラは大声でロトを呼びなが
ら走り回るテオドラ。

しかし、本来のテオドラの姿であれば微笑ましいのだが、今の見

た田は大の男であるから奇麗だ。そりと、何やらクスクス笑われているようである。

本人であるあの衛兵がここを歩くときは苦笑するであろう。

……合掌。

「ロト……甲くあるのじゅ……」

「ハイハイ……。」

とりあえず、思考を放棄してじゅじゅ馬の対応をする事にしたロトだった。

side out

side out

「なに? アレフガルドに行きたい?」

「ナウジヤー」

何を言ひだすかと思つたら……」の皇女様は。

「別にいいが、面白い所じゃねえぞ？」

「いいのじゃ。お主のギルドがどんな所か見てみたいのじゃー。」

「…………じゃあ行くぞ。」

俺が初代マスターであるアレフガルドは、ドランが待機出来る場所の問題もあり、街の外れにある。ギルドメンバーは良い奴ばかりだが、仮にも皇女であるコイツが入つたりしていいのかどうか……。

「ロトさんー、お久しぶりですー！」

「ロトだつて？」

「おお、一代目じゃねえかーー！」

「久々だな！ 一代目！」

「一代目……元気だつたか？」

「おう、久々だなお前ら。」

アレフガルドになると、ロビンを筆頭にメンバーから声を掛けられた。てか、一代目ってヤクザかよ……。そういえば、最近全然顔出してなかつたな。

「それで、本当にどうしたんですか？ つと……後ろの方は？」

「コイツが俺のギルドが見たいって言つてな。テオ、モシャスを解除していいぞ。」

「わかったのじゃ。」

テオが本来の姿に戻るとギルドの面々が誰だか判らずに頭をひねる。そういえば、「コイツは余り外部に知られてなかつたな。

「あ、コイツは第三皇女のテオドラだ。」

「モーヴィヤー妾が、ヘルス帝国第三皇女、テオドラジヤー。」

な、なんだつて、！？

テオドラが薄っぺらい胸を張りながら、言い放つと全員びっくりしている。

さすがに、これはコイツらもびっくりするか。お、この飲み物貰うぜ。

「一代目が恋人に皇女を連れてきたぞ！！」

「ふふっ！－！」

「 」「 」「 」「 」「 」「 」「 」

「こ、恋人かの／／／」

「しかも、幼女だ！」

「口りか。」

「口リだな。」

「一代目的趣味に文句付けんなよ。それより宴だ！」

おい！！！なんでそうなる！？不意討ち過ぎで噴いちゃねえか！俺は口リじゃない！！そして、テオは赤くなつてモジモジしてないで何か言え！！

テオとの恋人発言の誤解は解いたが、皇女が来たという事で結局お祭り騒ぎになつてている。テオも混じつて騒いでいるが、メンバーの誰かが“俺も軍で帝国の手助けをするぜ”と言つたら、顔に陰がさした。お祭り騒ぎで忘れているが戦争が始まつているのだ。

余談だが、帝国に籍を置いているギルドには連合との戦争への協力申請が来る。もちろん、戦争で死ぬ確率も高いので参加は自由だが、終結後は多額の報酬が約束されている。しかし、ギルドとしては貴重な人材が失われるかもしれないのに、従軍を全面的に禁止しているギルドもあれば、受け取る報酬の一部を納めるのを条件に

許可しているギルドもある。

因みに、アレフガルドは個人の自由にしている。このギルドを創設した、俺が陛下からの依頼で戦争の手助けをする可能性があるからな。

「口トさん！」

「アランか。ビリした？」

「いえ、口トさんが帰つて来たんだから久々に“稽古”でも付けて貰おうと思って。」

「ほう。」

ロジンのその発言に俺の口元が吊り上がる。

「一代田と二代田候補が“稽古”するらしいぞ――――――――――――

「オオオオオ――――――――――――」

「??.??.?」

話を聞き付けて、周りの連中も盛り上がり始めた。事情がわからぬテオが困惑してゐるな。

「ロ、ロード、稽古とはなんのじや？」

「見れば判るぜ。」

俺は盛り上がりに若干びびつてゐる様子のテオに「ヤツとしながらそう答えた。

この時の笑みは“イイ笑顔”だつたと自分でも思つ。

「こりますよー。ロードさー。」

「ハレヤあー、バッヂマイー。」

ギルドにある闘技場で俺とロビンは対峙していた。

俺はいつもの隼の剣を装備し、ロビンはトンファーと魔法具？の指輪を着けてゐる。

ぶつちやけて言つと“稽古”とはウチのギルド特有のイベント（

？）で、実質限りなく実戦に近い模擬戦だ。実戦に近い戦いで経験も積めて、回復役の奴の練習にもなるので頻繁にやっている。我ながら良い案だったと思つ。

閑話休題

ルールは簡単。相手に参つたと言わせるか、氣絶させるまで続行するシンプルなモノである。

ロビンもこれで実力を付けたので効果（？）も折り紙付きである。

「今日こそ勝ちます！――！」

「やつてみる――！」

開始の合図なんてものは無く、自分達で始める。

ロビンは頭を上げたと同時に駆け出し、俺もそれに随つて疾走する。

「やつてみる――！」

「ぐつー！貴方の剣撃は相変わらずッ――！」

「つまつ――？」

「ちつ！ルド・ル・ドルフ・アドルフィ 来たれ雷精 風の精 雷を纏いて 吹けよ 南洋の嵐」

」

アランの得物であるトンファーは棒の長い部位で防御をし、短い部位で突く、長い部位で遠心力を使いながら廻しが払う等の攻撃を主体とする攻守一体の武器である。

しかし、剣との間合いの違いから必然的にアランは捌く側になる。隙を突いて俺の懷に入り込み棒の長い部位で突きを繰り出すが、俺は上体を反らし、そのまま後ろへ爆転しながらマルチタスクを使用して呪文を発動させる。

「 雷の暴風！！」

「 《ライデイン》！！」

雷と雷が衝突し、爆発を起こす。しかし、アランは感覚で俺の位置を把握し、煙幕を切り裂いて俺に肉薄する。

「腕をつ！上げたなつ！！」

「当たりつ！前ですつ！口トさんの代理でつ！かなり高額な依頼を！こなしましたから！！」

斬り結びながら、アランと会話をする。本当にコイツは腕を上げた。

ガキンッ！－！

「ロトさんっ！これでケリを付けましょう！－！」

「おうよー・ドンと来い！－！」

アランの突きと俺の袈裟斬りが真正面からぶつかり、お互いに吹き飛ぶ。武器の腕での勝負は付かないと判断したアランが魔法で勝負を持ち掛けってきた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 净化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に」

アランが火の最高位呪文を詠唱し、俺は最大焦熱魔法を放とうと魔力を貯める。

アランの魔法適正は雷と火でかなり威力の高い魔法が放てる。雷と火では火の方が適正は高かつた。

「 燃える天空！－！」

「《ベギラゴン》……」

炎と焦熱は圧倒的な炎熱を生み出しながらぶつかり合つ。しかし、その均衡は数秒で崩れ去り炎は焦熱に飲み込まれた。

「ぐうう……最大障壁……」

「燃える天空を修得したのは褒めてやるが、まだまだ未熟だなチェックメイトだ。」

「やはり、燃える天空はまだ未完成ですかね……参りました。」

アランは炎熱の奔流を障壁で防ぎきつたが、それ以降の行動には対応出来ずに俺に首を取られてしまった。

アランが降参したことにより、この稽古は俺の勝ちに終わった。

「口トコ……。」

「ん？ テオか。 どした？」

再び始まつたお祭り騒ぎを隅でちびちび飲みながら、眺めていると何時の間にか抜け出してきたテオが傍にいた。

「……は……こ、ギルドじやな。」

「だろ？ 血魔のギルドだ。」「ここのギルドの面々を戦争で死なすのは嫌じや。ここの人だけでは無く、街の人々も！」

「…………。」

「一刻も早く、戦争を終わらせるべ。」

「…………ああ。」

テオは決意を固めたようだ。それなら俺が手助けしなくては、な。

その夜、城の一室を借りて寝泊まりしているロトの元に一人の客がいた。

「誰だ？お前。」

「そう殺氣立たないで欲しいな。僕は只、勧誘に来ただけだよ、『隻眼の龍騎士』ロト・ドラゴニクス。」

「夜に突然、部屋に入ってくるのは夜這いか襲撃と相場が決まっているだろ？。んで、名を名乗れ」

「それは失礼した。僕の名前はフェイト・アーウェルンクスだよ。」

ロトの切り返しに苦笑する様子を見せながら、フェイト・アーウエルンクスは名を名乗った。

「Fate『運命』ねえ……。んで、勧誘の内容は？」

「世界を救つてみないかい？」

Fate 『運命』の扱い手はやつ言い放つた。

第六話（後書き）

最近なんか戦闘シーンばつかだな……

突然ですが、ヒロインを募集します

ヒロインはテオドラ+麻帆良勢から4人～6人程で考えています
一人一票で、ヒロインにしたいというメンバーに入れてください
ユーモラでない方も感想を書けるので、気軽に投票をお願いします
m() m

期限は10月27日の0時までです

よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0106x/>

ネギま！ 龍騎士が行く

2011年10月9日13時38分発行